様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１０４

研究課題名（和文）W．G．ゼーバルト研究

研究課題名（英文）A Study of W. G. Sebald

研究代表者
鈴木　賢子（SUZUKI, YOSHIKO）

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：２０４０１４８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究はW．G．ゼーバルト作品についての包括的研究である。より広い射程においては、歴史の表象をめぐって、文学、アート、歴史学を横断するような知の枠組みを探求する試みである。既存のテクストを自由に引用・改変し、キャプションのない写真図版をレイアウトして構築されたゼーバルトの作品を研究するにあたって、テクストの素材（元になった原テクスト）や使用した視覚イメージの典拠を見つけ、かつどのような加工や改変をゼーバルトが加えているのかを突き止めることは最大の課題であった。アーカイヴ調査や現地調査を行うことで、従来知られていなかった無数の事実を突き止め、制作過程の実像に肉薄することができた。

研究成果の概要（英文）：This project is a comprehensive study of W. G. Sebald's works that seeks to develop an alternative framework for analyzing representations of history and memory by working across existing boundaries between different disciplines such as visual arts, literature and history. In this study I read visual images which Sebald weaves into his text, especially significations from interrelations of those images, and discussed their relations to the body text. A main task was to trace the origins of his materials and establish the process by which he reworked, altered, forged and integrated these materials into his books. For Sebald did not indicate any sources of most visual and textual materials he used. Archival work and field surveys enabled me to identify the sources of many materials he used and reconstruct many new facts about his production process.

研究分野：美学、芸術論、ドイツ研究

キーワード：W．G．ゼーバルト　視覚イメージ論　イメージとテクスト　歴史記憶とトラウマの表象　現代ドイツ文学　写真

１．研究開始当初の背景

Ｗ．Ｇ．ゼーバルト（1944-2001）についての研究は、とくに彼の不慮の死後である 2002 年以降は 1 人の現代作家に関するものとしては瞠目すべきスピードと量で研究書が刊行されている。しかしながら、研究スタート時の国内外の研究動向は、あきらかに初期の傾向とは異なってきている。もっとも目立つ変化は､｢ホロコーストの記憶」というテーマの相対化である。ゼーバルト作品はその受容の初期の段階において、「ポスト・ホロコースト」文学と見做されることがしばしばあった。しかし、68 年世代であるドイツ人ゼーバルトにとって重要なテーマであることは変わらないとしても、研究が進むにつれて、ホロコーストやナチズムの過去の記憶は、むしろ彼独特の技法を駆使した重層的な歴史洞察の一端として考える動向がこの数年高まっている。こうした近年の研究動向を反映した代表的なアンソロジーとしては Anne Fuchs, J. J. Long, *W. G. Sebald and Writing of History*, 2007 が挙げられる。またこの動向とともに、ゼーバルトの歴史意識を探る試みとして、ベンヤミン、アドルノ、フランクフルト学派との理論的連関も学術的に研究され始めている。

ゼーバルト作品は、既存テクストの引用やパラフレーズを重ねるスタイルでも知られているが、作品に組み込まれた原テクストを突き止め、現地での事実調査や詳細な文献学的アプローチによって、ゼーバルトが原資料をフィクションとしていかに加工しているのか、ゼーバルト文学成立の謎に迫った研究も発表されている。そうしたアプローチの例としては、論文 Klaus Gasseleder, “Erkundungen zum Prätext der Luisa-Lanzberg-Geschichte aus W. G. Sebalds *Die Ausgewanderten*. Ein Bericht”, in: Marcel Atze / Franz Loquai (Hrsg.), *Sebald. Lektüren*. Edition Isele, 2005, S.157-175. がある。このようなアプローチは、今後ますます増えてくると思われる。

２．研究の目的

本研究計画は、文学やアートが埋もれた記憶をいかに表象するのかという問題をめぐり、応募者がこの応募以前より行ってきた研究をベースとしている。とりわけ負の過去について、直接的な描写や形象化を回避し、テクストと画像を組み合わせることで、事実と虚構の間であらたな洞察を読み手にもたらすゼーバルトの作品は、文学の枠に留まらず歴史記述や現代アートにも影響を与えている。現在までの応募者の個々の研究を相互に連関させながら、ゼーバルトの記憶の技法がいかなるものであるかについて、学術的にまとめることが応募に際し設定した目的であった。

ゼーバルトにおいて、写真や複製図版はたんなるテクストに付随する挿絵や図解ではなく、むしろテクストと相互干渉を行うような、独立した意味作用のレベルとして存在する。それゆえ、従来なされてきたようなテクスト中心の研究に留まらず、ゼーバルトにおける視覚イメージとテクストの関係について集中的に考察するというアプローチをとった。

しかしながら、作品に使用された視覚イメージおよび原テクストの由来やゼーバルトによる加工・操作のプロセスの実体把握が脱落している状態では、上記のようなアプローチをとるゼーバルト研究は、誤認によって躓くか、その危険を避けて受容論的批評に留まることになる。そもそも、ゼーバルト研究全体において、このようなソースや加工・操作のプロセスについては、これまで研究が進んでいなかった。今回の基盤研究において、アーカイヴで複数回に渡って進めた調査は、ゼーバルト研究全体におけるこうした脆弱な部分を補完するうえで欠かせないものである。この研究プロセスを経たうえで改めて、ゼーバルト作品の全貌が明らかになり、全体評価が定まるだろう。

より大きな射程においては、ゼーバルト作品の生成のプロセスが明らかになることによって、歴史言語の問題に対する 1 つの特殊解が見いだされることになる。また、現代アートの一傾向として、少なからぬアーティストたちが歴史認識に介入するような制作やプロジェクトを展開しているが、事実と虚構を織り交ぜるゼーバルトの制作手法を解明し考察することは、歴史学と現代アートの境界を崩しあらたな知のモードを仮構する試みの理論的支えとして資することになろう。

３．研究の方法

研究は次の二本柱を軸に計画・遂行した。

1)<u>ゼーバルトの理論研究</u>：これまでの応募者が行った理論研究をもとに、全体像を描く。資料を収集・読解しながら、ゼーバルトにおける視覚イメージの意味作用について考察し、ゼーバルト研究の新しい領域を開く。

2)<u>現地での資料調査とフィールドワーク</u>：個人の記憶、出来事の記憶、土地や場所にまつわる記憶を大きな主題とするゼーバルトの研究を、理論研究だけで完結させるのは不可能であった。ゼーバルトの作品は自伝的要素が強いことが大きな特徴であり、彼が生活し滞在した都市や地方で事実関係・事跡を調査することは、この研究にとって不可欠の要件であった。各地域の博物館、図書館、ユダヤ博物館、ホロコースト関連の展示施設、文学アーカイブで調査と資料収集を行った。

４．研究成果

1）理論研究

この「W．G．ゼーバルト研究」は、とりわけゼーバルト作品の視覚イメージに関して一定の知見と方向性を提示できたと考えている。このプロジェクト前半においては、ヴァールブルク学派の歴史家フランセス A．イエイツの記憶術研究を参照してゼーバルト作品における視覚イメージとテクストを分析・解釈した研究を行った。この研究を論文としてまとめたのが、論文①「W. G. ゼーバルトにおける想起の空間――建築と記憶術」『埼玉大学紀要(教養学部)』である。

プロジェクト後半においては、フロイトの精神分析理論を参照してゼーバルトの視覚イメージの配列を考察した研究を行い、2013 年クラクフで行われた国際美学会で発表した。さらに、イコノロジーの提唱者であるアビ・ヴァールブルクの制作したパネル群《ムネモシュネ・アトラス》や画家ゲルハルト・リヒター制作のパネル群《アトラス》と比較しつつ、ゼーバルトの視覚イメージ独特の意味作用を解明する研究を行った。この研究の一部を論文としてまとめたのが、論文②「W. G. ゼーバルト『アウステルリッツ』における想起の閾としての視覚イメージ――フロイトの「不気味なもの」を手がかりに」『カリスタ』ならびに論文③“Thresholds of Remembrance: A study of the Freudian uncanny in W. G. Sebald’s *Austerlitz*”である。

社会の集合的トラウマを表象する視覚イメージとその形態化として「心霊写真」の諸様態と比較しつつ、ゼーバルト作品の視覚イメージにおける染みやブレ、ボケ、画像の粗さについて、制作のプロセスを明らかにしながら分析した。さらに、そのような現れをゼーバルトが利用する意味について考察した。成果の一部は、2014 年 11 月に表象文化論学会で発表した。

ゼーバルト研究を補強するために、以下の研究にも取り組んだ。

ｉ）一橋大学「アドルノ研究会」への定期的参加。ゼーバルトに対するベンヤミンやアドルノの影響は大きく、この研究会に参加することで、本研究の理論的骨組みを立体的に構想することができた。

ii）アビ・ヴァールブルク、エルヴィン・パノフスキー等、ヴァールブルク学派のイコノロジーについての研究。

iii）歴史家フランセス・A・イエイツの記憶術研究。成果は論文①として発表した。

iv）ダダとそれ以降の時期におけるフォト・モンタージュの研究。アビ・ヴァールブルク《ムネモシュネ・アトラス》、現代ドイツ人アーティスト、ゲルハルト・リヒターの《アトラス》の研究。ゼーバルトの作品はドイツにおける「写真本」文化の歴史的後継として見ることもできる。社会に対する批判機能において、視覚イメージとその組み合わせがどのように力を発揮するのか研究した。

ｖ）フロイトにおける「不気味なもの」「死の欲動」概念とトラウマ論、「砂男」論を研究し、論文②の一部として発表した。

vi）場にまつわる出来事の記憶を作品のテーマとする日本人アーティストについての研究。おもな対象となったのは、建築家の宮本佳明、写真家の米田知子。学会発表①にて成果の一部を発表。

2）アーカイヴでの資料調査

2013 年 8 月、2014 年 2～3 月、2014 年 8～9 月、2015 年 2～3 月にわたり、アーカイヴで資料調査を行った。調査の対象となったのは、ゼーバルトの所蔵していた書籍・刊行物、遺品、手稿、書簡、新聞・雑誌、パンフレット、ゼーバルトが使用した画像、写真等である。現在までにさまざまな事実が判明したが、調べるべき資料が多く、関係者を介さないと最終的に確定できない事項もあり調査は進行中である。今後もこの調査をぜひ発展させたい。

3）現地での事跡調査

パリ、ロンドン、ノリッジ等イギリス東海岸地方地域、クラクフ、オフィシエンチム〔アウシュヴィッツ=ビルケナウ収容所〕、ワルシャワ、ウッジ（ポーランド）、ウィーン、アルゴイ地方ヴェルタッハ村（ドイツ）、ブリュッセル、アントワープ、ブレーンドンク旧収容所（ベルギー）、コルマール（フランス）、ゾントホーフェン（ドイツ）において作品に関連する事跡を踏査した。現地のアーカイヴや博物館での資料収集・情報収集も兼ねている。この調査でも、作品の読解だけでは分からないことが様々な形で見えてきた。一例を挙げるなら、作品に登場する地名や場所を辿ると、ゼーバルトが各都市を旅した際に、ユダヤ系の人々の居住区や縁の場所を歩き回っていたことが分かる。だがゼーバルトは多くの場合そのことを明示せず、テクストの無意識として作品に埋め込んでいる。これについてもいずれ論文にまとめたい。

4）国内外での研究成果の発表

2012 年度に美学会および表象文化論学会、2013 年度にポーランド、クラクフでの国際美学会、2014 年度、表象文化論学会で学会発表を行った。このうち、国際美学会での研究発表を足がかりに発展させた研究を、英語論文として刊行できたことは、研究成果の国際的な発信につながったと考える。

5）研究会および共同調査

本研究スタート以前より継続している香川檀氏（武蔵大学）主宰の「記憶研究会」に参加（開催は不定期）。ドイツにおける歴史と記憶の表象をテーマに、研究発表や討論、書評会を行った。

おなじく本研究スタート以前より継続している藤野寛氏、西村誠氏主宰の一橋大学「アドルノ研究会」に参加。月１回の例会および夏季・秋季の研究合宿にて、テクスト・クリティークと討論を行っている。活動の詳細は研究会のＨＰで閲覧可能。この研究会での研究活動は 2015 年 4 月より、科研費基盤研究の対象になっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①鈴木賢子「W．G．ゼーバルトにおける想起の空間――建築と記憶術」『埼玉大学紀要(教養学部)』第 48 巻第 2 号　pp.123–147. 2013 年 3 月 31 日.
(http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?item_id=27302)

②鈴木賢子「W．G．ゼーバルト『アウステルリッツ』における想起の閾としての視覚イメージ――フロイトの「不気味なもの」を手がかりに」『カリスタ』第 21 号　美学芸術論研究会　2013 年[2015 年刊行]　pp. 79–118. 査読審査制

③鈴木賢子 “Thresholds of Remembrance: A study of the Freudian uncanny in W. G. Sebald’s *Austerlitz*” 国際版『美学』第 19 号　2015 年　査読審査制
(http://www.bigakukai.jp/aesthetics_online/index_jp/index_jp.html)

〔学会発表〕（計　４件）

①鈴木賢子“Perspectives in Disaster Landscape. Central Perspective in Disaster Landscape and Methods of Memory Preservation by Katsuhiro Miyamoto”. The 7th Annual Meeting of the Association for the Studies of Cultural Representation, panel: “Historical Imagination”. (http://repre.org/repre/vol16/conference07/panel03/)　2012 年 7 月

②鈴木賢子「W. G. ゼーバルトにみるイメージ認識と想起の閾」美学会　第 63 回全国大会　2012 年 10 月

③鈴木賢子“W. G. Sebald’s Art of Memory and Thresholds of Remembrance”.19th International Congress of Aesthetics: Aesthetics in Action, at Krakow (Poland) (http://www.ica2013.pl/). 2013 年 7 月

④鈴木賢子「W. G. ゼーバルト『アウステルリッツ』『土星の環』における視覚イメージ」表象文化論学会　第 9 回研究発表集会 2014 年 11 月 9 日

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木賢子（SUZUKI YOSHIKO）
東京芸術大学
美術学部
非常勤講師

研究者番号：20401482